

履修カルテシステムの分析による 教職課程指導室業務の検証（4）

－教職履修カルテ自己評価レーダーチャートの活用－

高橋 伯也^{a)} 田中 均^{a)} 竹村 精治^{a)} 並木 正^{a)} 古川 知己^{a)} 中村 信雄^{a)}

要旨：「履修カルテの分析による教職課程指導室の業務の検証（3）」において、履修カルテの自己評価のレーダーチャートの作成による学生の自己分析の結果について報告した^[3]。本報告は、2018年度教職実践演習履修者のレーダーチャートによる自己分析の実践報告である。2017年度の結果と比較して、レーダーチャートの形状から見た傾向は概ね一致しており、(1) 育成事項Ⅱは概ね評価が高い。(2) 育成項目Ⅲ、Ⅳは全体的に評価が低い傾向があると言える。しかし、レーダーの大きさは2018年度の方が大きく、3年次の評価より4年次の評価の方が低いという評価の逆転はほとんど起きていない。そこで、学生作成したレーダーチャートを調査してみると、評価の逆転が起きている学生は多数いることが分かった。にもかかわらず、全体でみると評価の逆転がみられない。本報告では、これらの要因も含め考察する。

キーワード：教職履修カルテ、教職実践演習、教育実習指導、自己評価

1. はじめに

実践報告「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証」^[1]（報告1と略記する）および「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証（2）」^[2]（報告2と略記する）において、2015年度、2016年度教職実践演習（実践演習と略記する）履修者の教職履修カルテ（履修カルテと略記する）の自己評価を分析した。その結果、実践演習履修者の全体的な傾向並びに履修者個々人の教職に関する知識・技能あるいは教職に対する意識変化などについて、①教職科目の学習が、学生の教師としての資質向上に寄与している、②学生自身による履修カルテ自己評価を用いた自己分析が学生の資質向上に有効であるという結論を得た。また、「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証（3）」（報告3と略記する）では、2017年度の実践演習における履修者自身による履修カルテの自己評価分析を実施した結果などに関して報告した。

本学の実践演習は、客観的な振り返りを行い、自らの課題を明確にすることから演習を始める。2018年度は、2017年度に引き続き履修カルテ自己評価から得られたレーダーチャートを用いた自己分析による、学生個人の課題の明確化に取り組んできた。

本報告「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証（4）」（本報告と略記する）では、2017年度、2018年度の自己評価から得られたレーダーチャートを比較し考察した結果を報告する。

2. 研究の目的と方法

履修者の自己分析は、履修カルテの自己評価を用いて、学生が自らの資質能力に関して分析するために

^{a)} 教育支援機構 教職教育センター

行う。中教審答申で示された実践演習の育成事項ごとの到達目標^[4]に照らして分類した評価項目ごとに、自己評価の平均値を基にレーダーチャートを作成させた。

育成事項毎の到達目標（1A、1B、…2A、2Bなどと記号で表した）を「表1 実践演習における育成事項とその到達目標」に示す。

表1 実践演習における育成事項とその到達目標

育成事項	到達目標	
Ⅰ 教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	1A	教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている。
	1B	高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たすことができる。
	1C	子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。
	1D	自己の課題を認識し、その解決に向けて、自己研鑽に励むなど、常に学び続けようとする姿勢を持っているか。
Ⅱ 教員として求められる社会性や対人能力に関する事項	2A	教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。
	2B	組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。
	2C	保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができる。（服装、言葉遣い、他教職員や保護者に対する対応など、社会人としての基本が身に付いているか。）
Ⅲ 教員として求められる生徒理解や学級経営に関する事項	3A	子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる。
	3B	子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができる。
	3C	子どもとの間に信頼関係を築き、学級集団を把握して、規律ある学級経営を行うことができる。
	3D	その他
Ⅳ 教員として求められる教科の指導力に関する事項	4A	教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項（教科等の知識や技能など）を身に付けている。
	4B	板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身に付けている。
	4C	子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができる。
	4D	自己の課題を認識し、その解決に向けて、自己研鑽に励むなど、常に学び続けようとする姿勢を持っているか。

実践演習履修者は、演習第2回で教育実習を振り返り教科指導と教科指導外に分けて成果と課題について考察する。その結果も踏まえ、演習第3回において、「表2 到達目標別評価項目分類表」に基づき自己評価個人票（図1）により各自のレーダーチャートを作成する。

レーダーチャートの作成を通して自己の課題を視覚的に捉えることで、課題と努力目標が明確になり、教職への意識が高まったと考えられる。

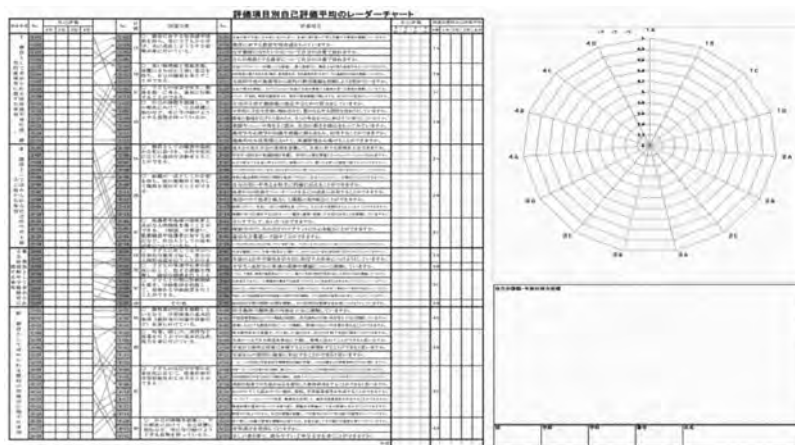


図1 自己評価個人票

表2 到達目標別評価項目分類表

育成事項	目標	No.	評価項目
I 教員としての愛情等られる使命や責任感	1A	1-02	生徒の喜びや悲しみを共に分かち合い、生徒に寄り添って考え行動する責務を理解していますか。
		1-04	教育に対する熱意や使命感をもっていますか。
		1-05	なぜ教師になりたいかについて自分の言葉で語れますか。
		1-06	自らが理想とする教育について自分の言葉で語れますか。
	1B	1-03	生徒のプライバシー保護に十分配慮し、個人情報など、職務上知り得た秘密を守ることができますか。
		1-12	学校教育に関する法令等(憲法、教育基本法、学校教育法等)を学び、その基礎的な内容を理解していますか。
		1-13	文部科学省の施策等から現代の教育課題を把握しようとして努めていますか。
	1C	1-01	生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する態度を育てる責務を理解していますか。
		1-14	いじめ、不登校、特別支援教育など、現代の教育課題に関心をもち、自分なりの意見をもっていますか。
	1D	1-07	自分が目指す教師像に接近するための努力をしていますか。
		1-08	日常的に文化や芸術に触れるなど、豊かな心や人間性を培おうとしていますか。
		1-09	趣味の領域を広げたり深めたり、自らの特技をさらに伸ばそうと努力していますか。
		1-10	新聞やニュース等をよく読み、社会の動きに関心をもち、活用することができますか。
		1-11	教育学や心理学の知識や理論に関心をもち、活用することができますか。
		1-15	健康的な生活習慣にむけて、体調管理を心掛けることができますか。
II 教員として求められる社会性や対人能力		2A	2-03
	2-06		中学生・高校生の発達段階を考慮し、相手の人格を尊重したコミュニケーションがとれますか。
	2-07		自分の担当する生徒に声をかけたり、相談にのったり、親しみを持った態度で接することができますか。
	2-09		クラス全体の生徒に対して後ろに座る生徒にもきちんと聞こえるように声の大きさや話す速さをコントロールできますか。
	2B	2-05	書類の提出期限や約束の時間を確実に守るなど、社会人にふさわしい行動をとることができますか。
		2-08	自分の思いや考えを相手に的確に伝えることができますか。
		2-11	他者からの評価やフィードバックを自己の成長に活用することができますか。
		2-12	集団の中で他者と協力して課題に取り組むことができますか。
		2-13	集団において、率先して自らの役割を見ついたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。
		2-14	組織の中で仕事をするにあたって「報告・連絡・相談」が大切であることを理解していますか。
	2C	2-01	自らすすんで、あいさつができますか。
		2-02	服装やみだしなみなどのエチケットにも心を配ることができますか。
		2-04	適切な言葉遣いで話すことができますか。
		2-10	人の話を聴く時には相手が話しやすい態度で接し、その思いや考えを相手の立場に立って受けとめることができますか。
III 生徒教員と関わりながら学級運営に	3A	3-01	生徒を観察したり、生徒の意見をよく聴いて、ありのままの姿を肯定的に受けとめることができますか。
		3-03	生徒のよさや可能性を引き出し伸ばす力を身につけようとしていますか。
	3B	3-02	中学生・高校生の発達の段階や課題について理解していますか。
		3-08	いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の生徒の特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。
	3C	3-04	生徒相互の好ましい人間関係を構築する集団づくりのための具体的な方法を身につけようとしていますか。
		3-05	生徒に正しい判断や行動を行うことの大切さについて指導するにあたり、自ら率先して模範を示す意欲や態度をもっていますか。
		3-06	学校における道徳教育や特別活動の目標と内容を理解し、その具体的な指導方法を身につけようとしていますか。
3D	3-07	総合的な学習の時間の目標を理解し、その具体的な指導方法を身につけようとしていますか。	
IV 教員として求められる教科の指導力に関する事項	4A	4-01	担当教科の教科書の内容を十分に理解していますか。
		4-02	学習指導要領およびその解説を精読し、担当教科の目標・内容等を十分に理解していますか。
		4-05	指導しようとする教育内容について理解し、指導のねらいや目標を考えることができますか。
	4B	4-03	担当教科を学ぶ意義や、その楽しさ・面白さを、自分の言葉で生徒に語ることができますか。
		4-09	生徒のつまづきや誤答を事前に予測し、指導に活かすことができると感じますか。
		4-10	生徒が主体的に授業に参画するような発問をすることができると感じますか。
		4-11	生徒からの質問に誠実に対応することができると感じますか。
		4-16	一人一人の生徒の学習状況や理解度を的確に評価し、それを踏まえた指導実践ができると感じますか。
	4C	4-06	生徒一人一人が学習内容に興味、関心をもつことができるように授業内容を工夫することができると感じますか。
		4-07	学習指導案の内容と作成の手順を理解し、創意工夫しながらよりよいものに作り変えていくことができますか。
		4-08	実際の授業での生徒の反応を想定した教材研究をすることができると感じますか。
		4-14	わかりやすく読みやすい教材、資料、学習指導案等を作成することができますか。
		4-15	プレゼンテーションソフトや写真、動画等を活用した、適切な情報資料を作成することができますか。
		4-17	指導計画が適切であったかを振り返り、問題点を明確にして次の計画に生かすことができますか。
	4D	4-18	授業力の向上のために、自己の課題を認識し、その解決に向けて学び続ける姿勢をもっていますか。
4-04		常に新しい知識や情報を積極的に取り入れ、生涯を通じて学び続ける態度を身につけていますか。	
4-12		常用漢字を習得していますか。	
4-13		正しい書き順で、読みやすい丁寧な文字を書くことができますか。	

次に、2017年度実践演習履修者（自己評価入力者180名分）および2018年度実践演習履修者（自己評価入力者178名分）全体の自己評価の平均値を用いて作成したレーダーチャートと比較し、本学の教職履修者の特徴などがみられるか考察する。

図2は、2017年度のレーダーチャートで、内側から1年次、2年次、3年次のデータであり、太線が4年次のデータである。年次が進むにつれて凸凹が減少し、項目間の評価のバランスが良くなってきていることが見て取れる。(1) 育成事項Ⅱ「教員として求められる社会性や対人能力に関する事項」の項目は概ね評価が高い。(2) 育成事項Ⅰの「教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情等」に課題が残り、特に、1B、1Dの項目に関しての評価が低い傾向がある。(3) 育成事項Ⅲ「教員として求められる生徒理解や学級経営に関する事項」、育成事項Ⅳ「教員として求められる教科の指導力に関する事項」に関しても概ね評価が低い。(4) 3年次のレーダーと4年次のレーダーの大きさに差がなく、項目によっては4年次には評価が下がっている（評価の逆転ということにする）ことが見て取れる。

図3は2018年度のレーダーチャートである。(1) レーダーの形状に関しては2017年度の形状と概ね同じと判断してよい。しかし、(2) 2017年度と比較してレーダーの大きさが大きく全体的に評価が高い。(3) 3年次から4年次の変化は小さいが評価の逆転が起きていないことなどが見て取れる。

これらの違いが学生の特徴によるものかどうかは判断できないが、個々の履修者のレーダーチャートを見てみると評価の逆転が起きているものも多くみられる。にもかかわらず全体としては逆転がみられない原因についても考察したい。

本報告では、実践演習において、学生自身による自己評価レーダーチャートからの自己分析を実施した結果について、2017年度と2018年度の結果を比較・考察して報告する。2017年度2018年度履修者の3年次から4年次にかけての変化が2016年度の評価の変化と比較して共通に小さいことから、実践演習において、実習後の振り返り後に自己評価を実施したことが原因の一つであると判断できる。数年かけて検証したい。

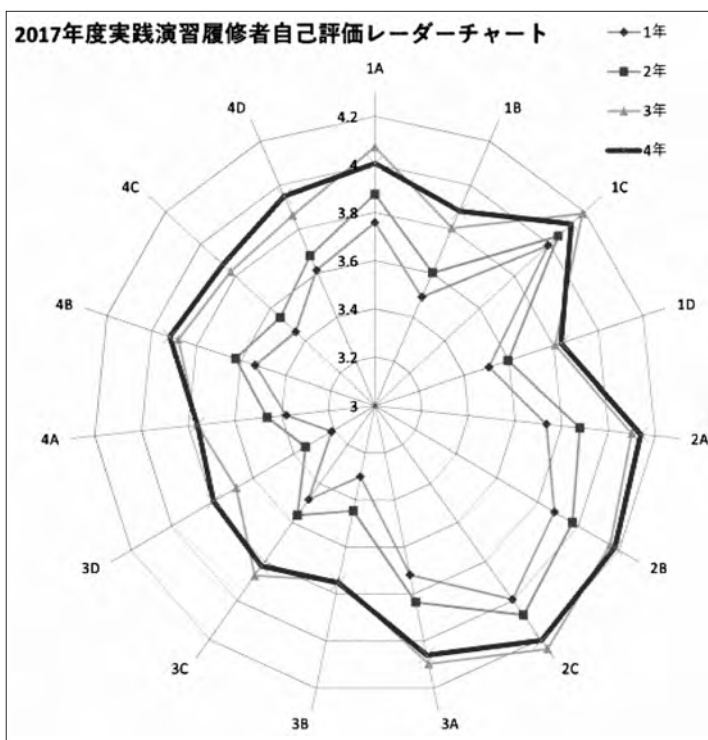


図2 2017年度自己評価分析レーダーチャート

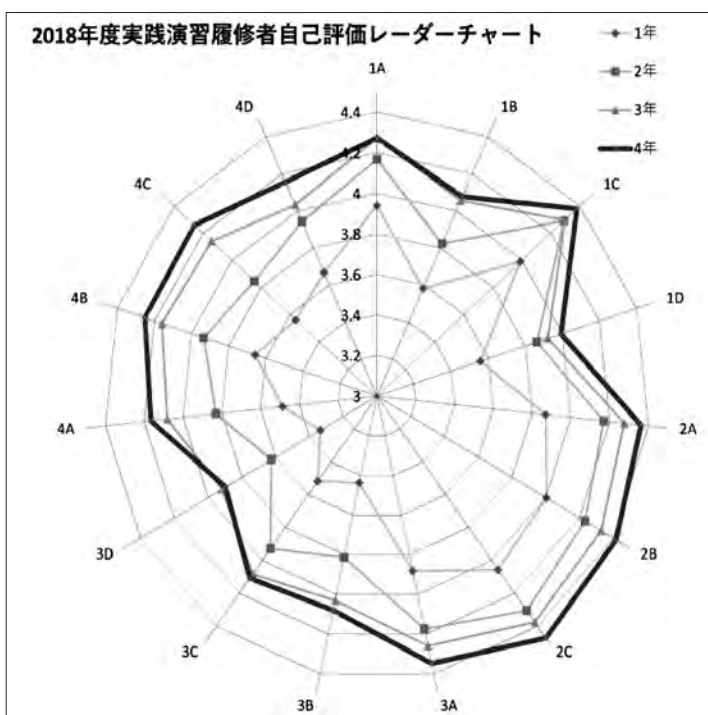


図3 2018年度自己評価分析レーダーチャート

3. 自己評価分析の結果と学生への効果

自己評価の自己分析において、2017年度と2018年度の学生が記述した自己の課題やその解決のための努力目標をいくつか紹介する。

(1) 生徒理解に課題を自覚している学生の感想と努力目標

- 中高生がどんな発達の段階にあり、どのような考えを持っているかについて把握できていないので、生徒との関わりを多く持ち、生徒の実態を把握する、そのうえで自分の課題を見付けだし、改善のため努力する。(2017)
- 子どもの発達や心身の状況に応じて課題の理解や適切な指導をすることに、まだ自信がないため、教職で学んだことを頭に入れつつ、現場に立った時に先輩教員の指導を見て学んでいきたい。(2018)
- 1と3が弱点。3は生徒とのかかわりに関することであるので、生徒とかかわりながら成長していく部分であると思います。生徒のことをよく見て理解しようとすることを意識しながら伸ばしていきたい。(2018)
- 教育実習を通して生徒理解の重要性を再確認した。(2018)

(2) 自己評価分析により、意識が変化したと思われる学生の感想

- 教員としての使命感を再度理解する必要がある。(2017)
- 3年から4年にかけて全体的に評価が下がっているのは、教育実習が要因としてあげられる。現場を知ることができたという風にプラスに捉えて生徒理解や指導力を高めることに励む必要がある。(2018)
- 1年生のときは、教職に関する理解が甘かったため評価が高い。2、3年と評価が厳しくなり、4年次では教育実習で自分の成長や課題が明確になり、より正確な評価ができた。今後は子どもの発達に関する知識の幅を広げるよう努めたい。(2018)
- 4年次教育実習を行ったことで、1～3年までの自己評価に甘い部分があったことに気が付いた。(2018)
- 1年生→3年生と学年が上がるにつれ全体的な評価を上げることができた。しかし、4年生での評価は3年生の頃より全体的に低い。これは、教育実習に行ったことで自己評価に厳しくなったことが要因としてあげられる。(2018)

このように、自己評価個人票の自己の課題・今後の努力目標欄を点検すると、自分の課題と向き合い、今後の努力目標を据えることができた学生や教職への意識が高揚した学生などが多数見られる。特に弱点をレーダーの凹の部分としてはっきりと認識することができたことと結論できる。

また、教育実習における成果と課題について考え、グループ討議させた後にレーダーチャートを作成させたことも、履修カルテの自己評価に真面目に取り組むことへの一助になっている。実践演習において、早い段階で、教育実習の振り返りおよび履修カルテの自己評価を実施させること、および自己評価のレーダーチャート化による自己分析の効果をはっきりと感ずることができた。

また、2018年度も、3年次の評価に比較して4年次の評価の方が低くなっていること（評価の逆転）に言及しているものもあったが、全体としては逆転が起きていない。2017年度と2018年度での相違に関しては次節で述べる。

4. 今後の課題

実践演習における自己評価分析が、実践演習への学習意欲や教職に向けての意欲向上に効果的であることが示せたと考えている。母集団が異なっていることを考慮に入れても、実践演習履修者全体のレーダーチャートの形状には共通の課題が見て取れることを考えれば、

- ① 育成事項Ⅱは概ね評価が高い。
 ② 育成項目Ⅲ、Ⅳは全体的に評価が低い傾向がある。
 と結論できる。

しかしながら、2017年度と比較して2018年度は、(1)レーダーが大きいこと、(2)評価の逆転が起きていないことに関しては考察が必要である。個人個人の評価基準の違いが大きな原因とも考えられるが、集団としての差異にまで影響を与えるかどうかについては疑問が残る。

2017年度と2018年度における3年次、4年次の自己評価の平均とその変化を表4に示す。

2017年度においては、27項目において逆転が生じている。逆転の最も大きいものは、評価項目1-04「教育に対する熱意や使命感をもっていますか」で0.19下がっている。続けて、2-02「服装やみだしなみなどのエチケットにも心を配ることができますか」の▲0.15（マイナスは▲で表記する）、3-05「生徒に正しい判断や行動を行うことの大切さについて指導するにあたり、自ら率先して模範を示す意欲や態度をもっていますか」の▲0.14、2-01「自らすすんで、あいさつができますか」の▲0.13である。その後4-18「授業力の向上のために、自己の課題を認識し、その解決に向けて学び続ける姿勢をもっていますか」、3-08「いじめ、不登校、特別支援教育など、現代の教育課題に関心をもち、自分なりの意見をもっていますか」、1-07「自分が目指す教師像に接近するための努力をしていますか」と続く。

これらの評価項目は、育成事項の到達目標の1A、1C、2C、3C、4Dの項目であるが、4Dを除いて、図2のレーダーチャートでも逆転が見て取れる。

それに対して、2018年度においては、5項目で逆転が生じているが、▲0.01が3項目、▲0.03および▲0.08がそれぞれ1項目である。結果として、レーダーチャートにおいては評価が等しくなっていないが、逆転は生じていない。

しかし、前節に示した通り、個人レベルで見れば、自己評価の逆転現象が起きている学生も見られる。レーダーチャート作成後の学生の感想の一部を紹介する。

- 1Aや1Dについて、実際に教育実習に行ってみて基本となるこれらの考えが揺らいでしまいました。どうして教員を目指すのか、どのような教員になりたいのか、どんなことをしたいのかことについて今一度考えなおしていく必要があると思います。
- 1、2年のときは、教職に対する意識が甘かったこともあり、比較的高かったが、3、4年生で指導法などの授業を通して課題が多くあることことに気づけた。教育実習を通じて生徒の心身の悩みへの

表4

2017年度				2018年度			
評価項目	3年次	4年次	4年-3年	評価項目	3年次	4年次	4年-3年
1-01	4.27	4.25	▲ 0.02	1-01	4.38	4.52	0.14
1-02	4.32	4.23	▲ 0.09	1-02	4.43	4.51	0.08
1-03	4.53	4.52	▲ 0.01	1-03	4.69	4.71	0.02
1-04	4.19	4.00	▲ 0.19	1-04	4.35	4.33	▲ 0.03
1-05	3.90	3.92	0.02	1-05	4.14	4.07	▲ 0.08
1-06	3.89	3.87	▲ 0.02	1-06	4.16	4.19	0.03
1-07	3.84	3.74	▲ 0.10	1-07	4.04	4.03	▲ 0.01
1-08	3.68	3.89	0.21	1-08	3.83	3.92	0.09
1-09	3.97	3.90	▲ 0.07	1-09	4.03	4.18	0.15
1-10	3.55	3.60	0.05	1-10	3.66	3.68	0.02
1-11	3.72	3.83	0.10	1-11	3.89	3.83	0.05
1-12	3.44	3.57	0.13	1-12	3.69	3.76	0.06
1-13	3.45	3.56	0.11	1-13	3.77	3.78	0.01
1-14	4.10	4.00	▲ 0.11	1-14	4.21	4.25	0.04
1-15	4.08	4.04	▲ 0.04	1-15	4.06	4.22	0.16
2-01	4.46	4.33	▲ 0.13	2-01	4.58	4.67	0.09
2-02	4.32	4.17	▲ 0.15	2-02	4.46	4.52	0.06
2-03	4.10	4.18	0.06	2-03	4.21	4.29	0.07
2-04	4.07	4.13	0.07	2-04	4.20	4.29	0.09
2-05	4.19	4.18	▲ 0.01	2-05	4.26	4.40	0.14
2-06	4.12	4.12	▲ 0.00	2-06	4.30	4.37	0.07
2-07	4.22	4.23	0.02	2-07	4.41	4.51	0.10
2-08	3.91	4.09	0.18	2-08	4.14	4.20	0.06
2-09	3.96	4.02	0.06	2-09	4.18	4.30	0.12
2-10	4.14	4.19	0.05	2-10	4.26	4.43	0.17
2-11	4.06	4.08	0.02	2-11	4.25	4.46	0.21
2-12	4.15	4.17	0.02	2-12	4.32	4.39	0.07
2-13	4.13	4.14	0.00	2-13	4.33	4.34	0.01
2-14	4.50	4.42	▲ 0.08	2-14	4.67	4.73	0.06
3-01	4.17	4.17	▲ 0.01	3-01	4.34	4.46	0.12
3-02	3.80	3.85	0.05	3-02	4.06	4.17	0.11
3-03	4.02	3.95	▲ 0.07	3-03	4.18	4.24	0.07
3-04	3.81	3.77	▲ 0.04	3-04	4.05	4.07	0.02
3-05	4.04	3.90	▲ 0.14	3-05	4.21	4.27	0.05
3-06	3.77	3.80	0.03	3-06	3.99	4.01	0.02
3-07	3.68	3.79	0.11	3-07	3.92	3.90	▲ 0.01
3-08	3.69	3.66	▲ 0.03	3-08	4.00	4.00	0.00
4-01	3.85	3.84	▲ 0.01	4-01	4.13	4.20	0.06
4-02	3.50	3.54	0.04	4-02	3.91	3.97	0.06
4-03	4.07	3.99	▲ 0.07	4-03	4.33	4.32	▲ 0.01
4-04	4.08	4.03	▲ 0.05	4-04	4.27	4.41	0.13
4-05	3.93	3.90	▲ 0.03	4-05	4.20	4.34	0.14
4-06	3.86	3.79	▲ 0.07	4-06	4.13	4.24	0.12
4-07	3.77	3.89	0.11	4-07	4.19	4.29	0.10
4-08	3.75	3.88	0.13	4-08	4.10	4.26	0.15
4-09	3.81	3.80	▲ 0.02	4-09	4.06	4.22	0.16
4-10	3.74	3.82	0.08	4-10	3.98	4.11	0.13
4-11	4.11	4.07	▲ 0.04	4-11	4.31	4.43	0.12
4-12	3.87	3.96	0.08	4-12	3.97	4.16	0.19
4-13	3.64	3.87	0.23	4-13	3.85	3.91	0.06
4-14	3.68	3.80	0.11	4-14	3.99	4.11	0.12
4-15	3.60	3.72	0.12	4-15	3.87	4.03	0.15
4-16	3.75	3.84	0.10	4-16	4.08	4.16	0.08
4-17	3.93	3.94	0.01	4-17	4.28	4.42	0.14
4-18	4.20	4.09	▲ 0.11	4-18	4.42	4.50	0.08

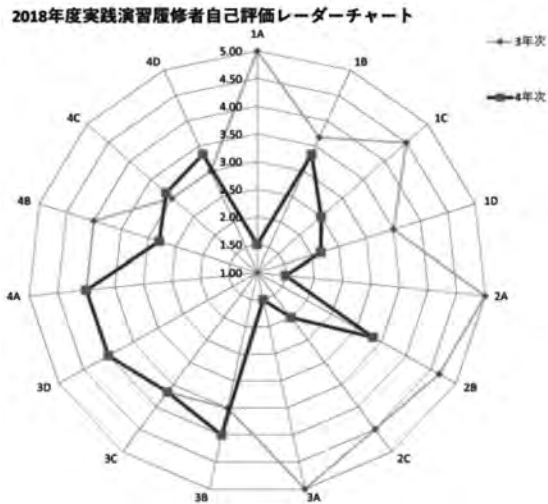


図4 個人レーダーの例A

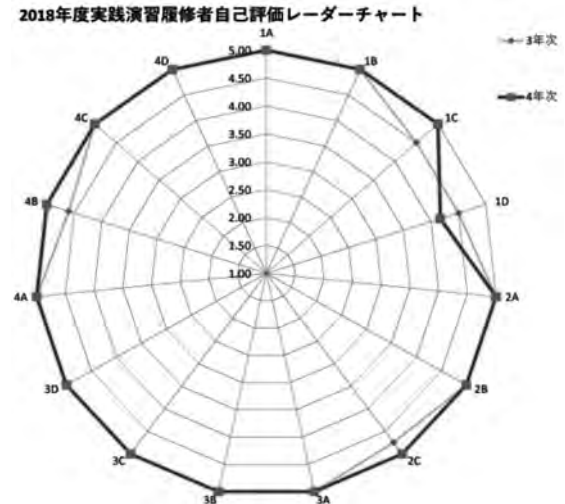


図5 個人レーダーの例B

対応や授業力など実践力が不足しているなどの課題が見つかった。

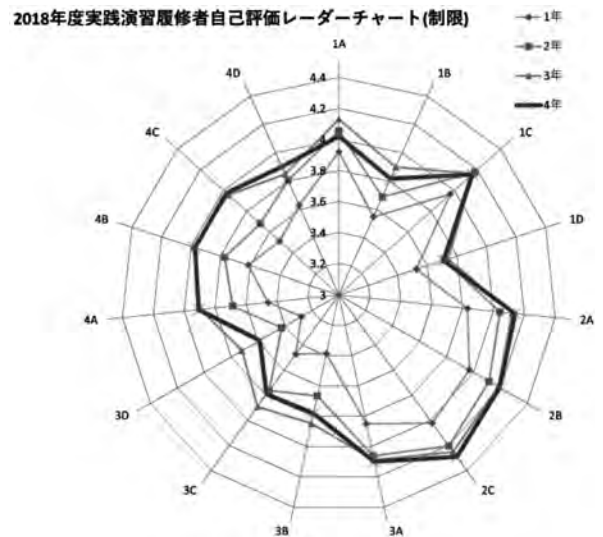
- 全体的に言えることは、認識が甘かったということだ。3年生までは「わかっているつもり」「できているつもり」になっていたということが4年生での教育実習を通じてよくわかった。
- レーダーチャートを見て教育実習に行ってみて見えた課題はいくつもあるように感じた。特に4年の時点で平均が3になっているもの（子供の発達等を考慮した指導、総合的な学習の時間）に関しては特に解決すべき課題点と感じた。
- 全体として、教職1年から3年にかけて自己評価が高くなった。教職の学びを通して成長を実感したからだと思う。しかし逆に、4年目になって自己評価が下がった。これは、教育実習に実際に取り組んだ経験を通して、自分にはまだ教師として、現場で実践していくには多くの課題があることが分かったためだと思う。

ここで、学生の個人のレーダーチャートを2種類紹介したい。1つは評価の逆転が起きている学生（図4個人レーダーの例A）で、他方は全体的に評価の高い学生（個人レーダーの例B）のものである。

図4の例は、比較的に評価が低めであり、凹凸が多い。評価の逆転も度合いが大きい。図5の例は、4年次の評価がほとんど5であり、逆転は起きているものの逆転は小さい。正確に数を調査したわけではないが、凹凸が多く、評価の逆転の数も多い学生は個人票を見る限りかなりの数いるように見受けられる。例Bのような学生はそれほど多くはないが、このようなデータが平均に大きく影響を与えている可能性があるように感じた。そこで、自己評価の平均が4.6を超えるものを排除してレーダーチャートを作成してみたところ「図6自己評価レーダーチャート（制限）」のようになった。

レーダーが小さくなったのは当然予想できたが、逆転が5項目で見られたのは予想を超えた結果であった。自己評価が半数以上5である学生のデータがここまで全体に影響を与えているとは考えていなかった。

データを制限することによって、凹凸の多いレーダーチャートを持つ学生の特徴をより正確に得られたように思われる。結果として、2018年度も教育実習を通して多くの学生が自己評価を下げていると結論できそうである。また、2017年度2018年度共通に見られた、項目IIに関しては概ね評価が高く、項目



III、IV に関しては評価が低い傾向があることも見て取れたことを考えると、データを平均 4.6 以下に制限したうえで分析する必要性が出てきたともいえる。

今後は、制限する数値や制限の必要性に関しても研究していきたい。また、本報告においても学生個人個人のレーダーチャートに関して統計的に調査していないし、教職に就くことを希望している学生と企業への就職を希望している学生ごとの調査や、教員採用試験合格者についての調査や研究、学部別・学科別の考察などには取り組んでいない。また、極端に自己評価が高い学生は、教員の評価に比較して、自己の評価が甘く、課題も見られる傾向がある（オール 5 に近く、評価の逆転も見られない場合が多い）ように思われる。しかし、中には優秀な学生も散見される（例 B の学生は優秀であるが多少評価は甘い）ので、例えば平均 4.7 以上のように一律に調査から除いた結果が分析に適しているかという課題も残る。今後の研究課題として取り組んでいかなければならない。

5. まとめ

報告 1 により、教職カルテの自己評価から、実践演習履修者の教職に関わる資質の向上を見ることができた。報告 2 では、自己評価をレーダーチャート化することにより、学生の課題や教職に対する課題意識について確認する方法などについて報告した。報告 3 において、実際に自己評価レーダーチャートを作成した結果について報告した。本報告では、2 か年における自己評価のレーダーチャートを比較した結果などについて報告した。

教育実習の振り返りから始まり、自己評価のレーダーチャートによる自己分析、目指す教師像と努力目標などの演習を行うことによって、学生の自己の課題の明確化や、自己改善への意識と教職への心構えを高めることに寄与できたと考える。単に教育実習の振り返りを行うだけでなく、レーダーチャートを作成することにより、自己評価への取り組みや、教育実習の経験による評価基準の適正化が図れたと考える。自己評価のレーダーチャート作成を通じた自己分析は、学生の資質向上及び課題意識の高揚に有効であると結論できる。

教職課程の改編により、2019 年度入学生から履修カルテシステムが改良され、自己評価項目も変更になる。変更後の自己評価項目の育成目標への分類など多くの課題が残っているが、現履修カルテにおける自己評価の分析に関してできる限り研究し、より正確な分析ができるようにしていきたい。

参考文献

- [1] 東京理科大学 教職課程指導室 (2017) 「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証」 東京理科大学教職教育研究 創刊号 ,pp.143-156
- [2] 東京理科大学 教職課程指導室 (2017) 「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証 (2)」 東京理科大学教職教育研究 第 2 号 ,pp.99-106
- [3] 東京理科大学 教職課程指導室 (2018) 「履修カルテシステムの分析による教職課程業務の検証 (3)」 東京理科大学教職教育研究 第 3 号 ,pp.97-106
- [4] 中央教育審議会 (2006) 「教育実践演習 (仮称) について」 中教審「今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)」 別添資料
- [5] 梅津徹郎・近藤健一郎 (2014) 「教職必修科目「教職実践演習」の取り組みをふりかえって」 北海道大学教職課程年報 , 4, pp.1-14
- [6] 草川剛人・樋浦郷子・横山明子 (2014) 「教職履修カルテの意義と課題」 帝京大学ラーニングテクノロジー開発室年報 第 11 巻 ,pp.99-104
- [7] 村田俊明 (2012) 「教員の資質能力の向上を図る「履修カルテ」導入の諸問題」 摂南大学教育学研究 Vol.8,pp.27-43